

法華寺庭園の調査

—第632次・立会第2020-24次

1 はじめに

法華寺庭園は、法華寺客殿にともなう庭園である。法華寺本堂西辺の築地塀に囲まれた一面にあたる「主庭」は、客殿の上の御方からの眺望を意図し、中央に池を配して南の正面に位置する出島上の築山には枯滝石組と枯流れを設ける。その背後には常緑樹の混植による高生垣がまわる。上の御方から南西方向には、土橋越しに岩島や対岸にある築山の石組を望むことができる。

本庭園は、2019年度から保存整備事業の一環として発掘調査を実施しており、昨年度の第618次調査では池護岸の崩壊要因の把握および構築技法の解明を目的に、池南半部の岸について調査した（『紀要 2020』）。

今年度は池の北半部を対象に、築山景石の状況の確認および池護岸の状況を解明することを目的として調査をおこなった（図228）。調査区は築山北面（Aトレンチ：1.0×3.8m）と池北岸（Bトレンチ：0.6×2.2m）の2カ所に設定した。調査面積は合計5.1㎡である。調査は2021年1月12日に開始し、1月25日に終了した。

第632次調査と並行して実施した庭園護岸改修工事にもなう立会（第2020-24次）の成果についても、あわせて報告する。

2 検出遺構

Aトレンチ 調査区南部の層序は表土（厚さ5～10cm）下で、築山の盛土上面にいたる（標高67.4～67.9m）（図229）。池側にあたる北部の層序は、表土（厚さ約5cm）の下に、擬木列にともないカキツバタの床土となる黄灰色砂質土層（約10cm）、板列にともなう暗褐色粘土層（約10cm）、灰褐色砂質土層（約10cm）、暗褐色粘質土層（15～20cm）が堆積し、地山となる灰色粘土（標高66.8m）に達する。

調査区南部で検出した築山SX11475は黄褐色粘質土や灰色砂質土により構築されている。築山は北に向かってなだらかに下り、景石SX11472（石①～④）が配される（図229・230）。標高67.2～67.3mには池の水により浸食された空隙を確認し、空隙の下位では灰色砂質土層を確認した。また、築山の盛土上面と石①・④の間にも空隙があ

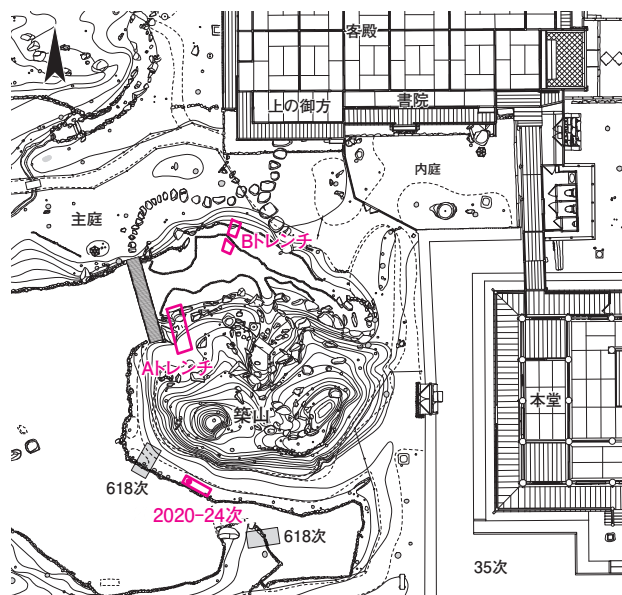


図228 第632次調査区位置図 1：500

り表土が堆積する。石①・②・③の間には土はなく、これらの石のみで支えあっている状況であった。また石②は石組護岸（後述）と接する部分が破損している。

調査区北部では現在もカキツバタの柵として機能している築山北裾の石組護岸SX11473と擬木列との間を調査した。SX11473は地山の灰色粘土直上に据えられている。また、護岸を支える木杭を検出した。擬木列から50cmほど陸側で木杭と竹製のしがらみで留められた板列SX11474を検出した（図231）。板列は幅10～15cm、厚さ0.5cmの板を重ねて弧を描くように区画をつくる。板は長さ70cmで地山の灰色粘土に約20cm打ち込んでいる。直径6cmの木杭を約40cm間隔で打ち、割いた竹を横に組んで板列をとどめる。

Bトレンチ 上下2段の擬木列により北部・中央部・南部に分かれる（図232）。基本層序は、北部では表土（厚さ約5cm）、黄褐色砂質土（約15cm）、3～5cm大の礫敷SX11480を上面にほどこす灰色土ブロックを含む黄褐色粘質土（約10cm）を確認した。中央部では表土（約5cm）、擬木列にともないカキツバタの床土となる黄灰色砂質土（5～35cm）、暗褐色粘質土層（10～20cm）、黒褐色粘質土層（約20cm）が堆積し、地山となる灰色粘土（標高66.9m）に達する。南部では、池堆積土直下で地山となる灰色粘土（標高66.7m）にいたる。

調査区北部で時期不明の礫敷SX11480を検出した（標高67.4m）。その下の灰色土ブロックを含む黄褐色粘質土

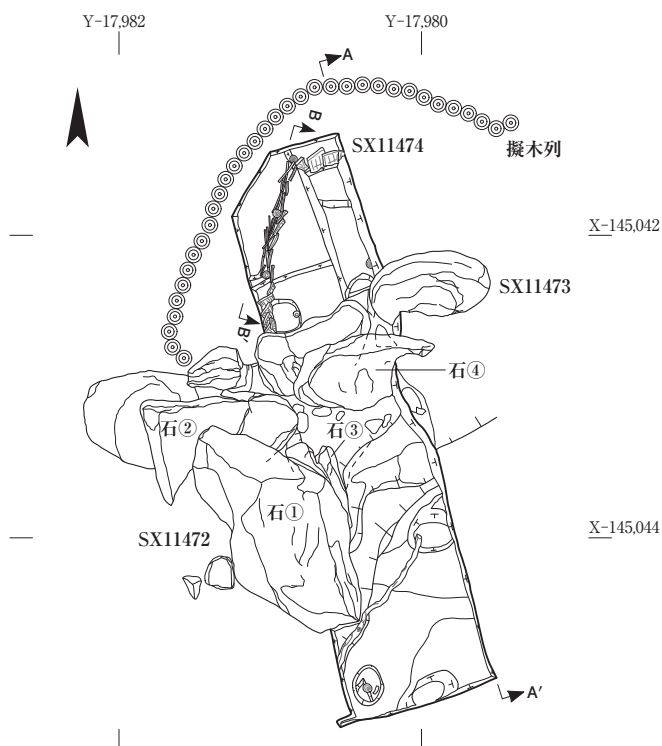


図230 第632次調査 Aトレンチ全景(北から)

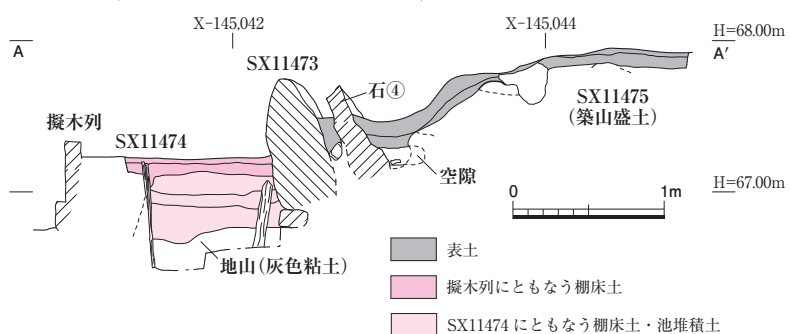


図229 第632次調査 Aトレンチ遺構図・土層図 1:50

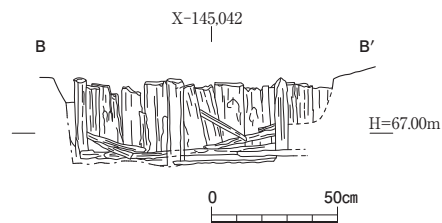


図231 板列SX11474立面図 1:30

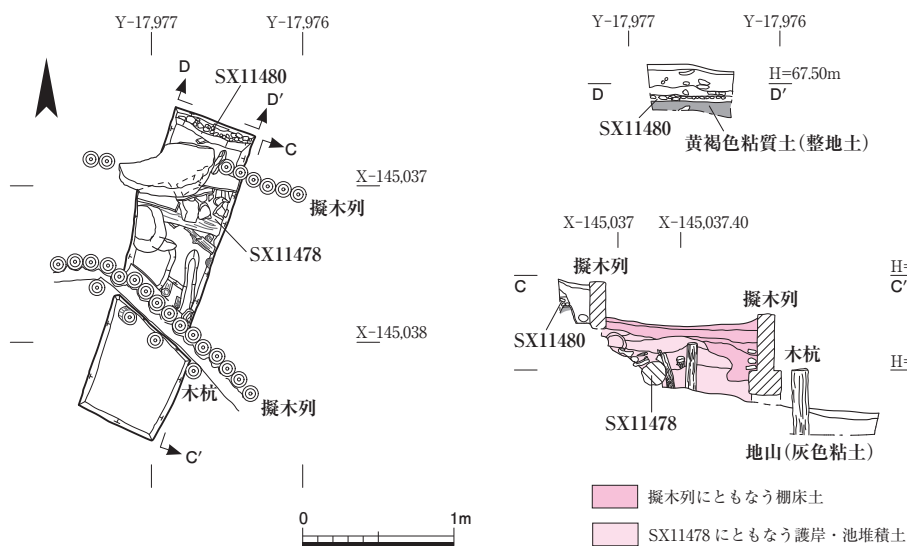


図232 第632次調査 Bトレンチ遺構図・土層図 1:50

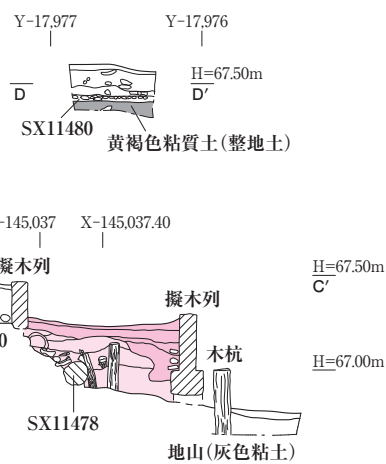


図233 Bトレンチ胴木・瓦出土状況(南から)

は礫敷きの整地土である。上段の擬木列はこの礫敷を壊して設置している。

中央部では南側の擬木列から50～70cm陸側で直径約15cmの胴木SX11478を確認した。胴木は直径5～6cmの木杭で留められている。また横材として割いた竹を使用していた。胴木の上位では瓦片および拳大の礫を検出し、池側に落ち込むような状態で人頭大の石を検出した。さらに近世後期～現代の軒丸瓦、軒棧瓦、熨斗瓦各1点が標高67.2m付近で面をなすように敷かれていた(図233)。これらはAトレンチで検出した空隙の標高と同じであり、浸食でできた空隙に瓦や礫を詰めることにより石積護岸の裏込めが補修された可能性がある。

池底部では、池の堆積土を除去すると地山の灰色粘土を検出し、遺構は確認できなかった。池の造成により地山まで掘削されたことを示すと考えられる。

3 出土遺物

土器・瓦・木片等が出土した。土器は土師器、須恵器、近世陶磁器、白磁が整理用コンテナ1箱、瓦は軒丸瓦1点、軒棧瓦1点、熨斗瓦1点、釘穴あり平瓦2点と雑瓦がコンテナ3箱、木片がコンテナ1箱、鉄器1点である。

4 小 結

Aトレンチ 盛土により構築された築山を検出した。築山北面の景石のうち一部(石①～④)は、原位置を保っていないと判断される。

石①・②・③は調査区西方の土橋直下にある石積護岸と接している。この石積護岸は園池の他の部分と同様に裏込土の流出が認められ、既に一部は崩落している。西方の石積護岸および築山盛土が、浸食により土砂が流出して空洞化したことに起因して、石積護岸と石組護岸SX11473の接続部にあたり、かつ重量のある石①・②が載った部分が崩落し、石①・②・③が下方へずれた可能性が高い。石④も同時に前方へ倒れたものと考えられる。石①・④の間に堆積する表土は崩落以後の堆積土である。ただし石③については、石④同様に景石とみて石①・②崩落時に石①の下に滑り込んだと考える案と石①の位置を調整するために石①下部に入れられた石材とみる案の2案を考え得る。このように景石のずれや前傾は調査区西方の石積護岸が崩落したことに起因する可能性が高く、石

積護岸の保存整備が必要なことを改めて確認できた。

また、カキツバタの柵の変遷を確認した。法華寺庭園を写した古写真によると、昭和12年頃にはカキツバタが石組護岸際の数ヵ所で点在する状況を確認でき、柵はみられない¹⁾。昭和41年には調査区東方にあたる築山東北部に柵を確認できるが、Aトレンチ付近に柵はみられない²⁾。また、昭和61年の写真³⁾ではカキツバタの群生範囲が拡大しており、一部板列と竹しがらみを確認できる。板列SX11474はこの頃までに設置されたものとみられる。

Bトレンチ 木杭で留めた胴木を確認し、池護岸が胴木をともなう護岸から擬木列へ変遷したことが判明した。主庭の池では胴木は石積護岸の基礎として用いられ、今回の調査区で検出した胴木も石積護岸の下部の可能性が高い。胴木を用いない石組護岸による出島部との構築方法の違いが明瞭になったといえる。また、時期不明ながら礫敷による舗装面を確認した。今後、礫敷の範囲についても注意が必要である。

なお、第618次調査で指摘された法華寺庭園の作庭年代に関する新たな知見を得ることはできなかった。主庭の作庭および変遷の詳細については、引き続き関連調査を進める必要がある。

5 立会第2020-24次

築山南岸の護岸改修にともなう掘削時に、古代の柱穴とみられる遺構を検出した(図228)。

表土下には石積護岸の裏込土となる褐色砂質土・灰黄褐色砂質土が堆積し、標高67.1～67.2m付近には浸食による空隙があり、瓦が大量に詰められていた。これらの瓦を除去した暗灰色粘質土層上面で柱穴を検出した(標高67.1m)。柱穴は一辺0.6～0.7mで深さは0.3mまで確認した。埋土は暗黄灰色粘質土である。柱穴にともなう遺物は出土していないが、約2m西方で実施した第618次調査3トレンチでは、暗灰色粘質土層を奈良時代の可能性があるとみている。検出した柱穴は、現本堂解体修理時の下層調査で確認された奈良時代の掘立柱建物と柱筋が揃うことから関連性がうかがえる。(小田裕樹)

註

- 1) 重森三玲『日本庭園史図鑑』14、有光社、1937。
- 2) 光明宗法華寺『名勝法華寺庭園保存活用計画』2020。
- 3) 奈文研所蔵